



パタゴニアのキャンプで「自宅待機」

■ 真鍋 真



約6600万年前のある日、現在のメキシコのあたりに直径約10キロメートルの隕石が衝突した。これによって急激な環境変化が引き起こされ、ティラノサウルスやトリケラトプスなどの有名な恐竜たちは絶滅してしまった。しかし、恐竜の一部から進化していた鳥類は体が小さく、少ない食量でやり過ごすことができたために、恐竜は完全な絶滅を免れたと考えられている。これは隕石衝突前後の化石が数多く見つかった北米の化石に基づく仮説である。アルゼンチン自然科学博物館のチームは、昨年(2019年)、白亜紀最末期(約7000万年から6600万年前)の恐竜の化石をパタゴニア南部で発見した。2020年3月、日本の国立科学博物館も調査に参加することになった。私たちはアルゼンチンのデータを、アジアや北米のデータと比較することによって、隕石衝突の全世界的な影響を明らかにしたいと考えている。

アルゼンチンは3月3日になってコロナウイルスの最初の症例が確認されたばかりだった。私は3月8日にアルゼンチンに到着し、9日にエル・カラファテの町から標高1000メートルほどの発掘地に向かい、キャンプ生活を始めた。キャンプ地でも発掘地でも電波の圏外なので、久しぶりにインターネットから隔離された生活を送るようになった。アルゼンチン政府は、3月12日になって、アジアやヨーロッパなどの感染地域からの入国者に、2週間の自宅もしくはホテルでの「自宅待機」を命じ、3月15日からは非居住者に対して国境を閉鎖した。私たちは、3月23日まで、アルゼンチン25名、日本人5名の30名で、恐竜化石を発掘しながら、

■ 真鍋 真
国立科学博物館・標本資料センター コレクションディレクター

東京生まれ。横浜国立大学教育学部卒業，米イェール大学地質学・地球物理学部 MSc 課程修了，英ブリストル大学理学部 PhD 課程修了，PhD。1995 年から国立科学博物館に勤務。恐竜の化石から進化を読み解こうと，日夜，化石と「対話」を試みている。



竜脚類恐竜の尾

キャンプ地で「自宅待機」することになった。

ベースキャンプから少し登ったところに崖があり，そこまで行くとわずかな電波をひろって，電話とかインターネットすることが可能だった。ここからブエノスアイレス，日本と連絡を取ったりするようになった。街中にいれば，常にあらゆる情報が入ってくるが，パタゴニアの山中では朝晩2回，それも短時間しか情報収集ができない。そのような状況の中で学習したのは，情報に一喜一憂しないことと，事前に複数の選択肢を準備しておくことである。それは対策を考える作業プロセスの中に，時間という「空間」が存在することによって育まれたものだった。瞬時に欲しい情報を得られる現代社会において，失われてしまった「空間」だったのかもしれない。

3月28日，300キロメートルほど離れたリオ・ガジェゴスからブエノスアイレス行きの便が運行されることになり，ブエノスアイレスまで移動することができた。フランスが自国民を救出する特別機を31日に飛ばすという情報を得て，それに便乗させてもらい，パリ，アムステルダムを經由して，4月2日に帰国することができた。今回のパタゴニアでの「自宅待機」は，私たちにもいろいろなことを気づかせてくれた貴重な2週間だった。